



地球に暮らそう



加藤 大吾 KATO Daigo
アースコンシャス代表 ビースフルライフワーカー

「幸せ感あふれる生き方の実践者、提案者」として、パーマカルチャーを基本においた農的暮らしと学びの場づくりを行う。企業の社員研修や地元・都留文科大学との協働事業、自らの家を開放して母と子の自然体験を行う「ははとこ Cafe」、「地球と人に優しい暮らし体験」などの主催事業など、活動は多岐に渡る。著書に「地球に暮らそう〜生態系の中で生きるという選択肢〜」(2010年 旅と冒険社)がある。「かとうさんちの授農日」毎月第一土日開催 <http://www.earth-c.info/>

有り余るほどの自然の中で仕事をさせてもらって、1年後に東京世田谷に戻った。入ってきたのは「今日も昨日も土を踏んでいない」「雨が降った時の匂いが違う」という事実だった。感覚的に自分の居場所・暮らしのステージはここではないということが心の中に入り込んできた。自分がやりたいことは何なのか。自分が居るべき場所があるはずだ。それを探しに家族旅にでる。一年半かけて、「ここだ!」山梨県都留市と出会う。

当時、妻1人、子ども2人、家は都営住宅、貯蓄もないし、豪華な車もないし、かじれる親のスネもない。そんな中で自分らしい暮らしを模索する。森の中で暮らすという挑戦が始まる。チェーンソーで森を開拓、基礎から自分の家を立てた。資金も少なく、寺院や「愛・地球博」の廃材を使うしか手がなかった。一から形にしていくことと、たっぷりの肉体労働は今までにない充実感だった。みんなの力を借りて、道を作り、家を建て、地元の人たちに仲間に入れてもらって畑と田んぼを始めることもできた。

手作りの家にはテレビはなく、薪ストーブがある。森から切り出して斧で割っておいた薪に火をつけて暖をとる。薪がはぜる音が何とも心温まる豊かなひとときを演出する。部屋は1つだから家族はいつも同じ部屋に居て、本を読んだりおしゃべりしたりしている。照明は8Wがいくつかしかないから、薄暗くいい雰囲気だ。子どもたちは折り紙をしたり、ナイフを使って工作したり。作った人形と自ら考えた台本で人形劇が始まり、笑い声に包まれる。無農薬無肥料で育った収穫物の選別をはじめれば、自然と子どもの手も伸びる。薄暗い夜の暮らしは意外とやりたいことが溢れている。

野生のクルミやアケビ、世話すらしていないブルーベリーやブラックベリーは自然から直接“おやつ”になる。育てた野菜やお米、麦、製麺所にお願した乾麺が子どもたちの主食になる。田んぼでは

合鴨が鳴き、雑草も混在している畑では生き活きと植物が切磋琢磨している。庭ではニワトリとそのヒナが駆け回る。生態系が生み出した腐葉土や虫をついばんで、彼女たちも生態系の中に入る。その横で子どもたちは鍋、釜に土と野草を使っておまごどをしている。「プリ君が蹴ってくるから怖い!」そのニワトリは食べる優先順位が高い。

時にバサバサと動きながら熱く滴るニワトリを見つめている。「いろいろ嫌なことされたけど…ありがとう」だんだん動かなくなっていくのを観ながら、娘がつぶやく。どこの段階からか「おいしそう!」に変わる。少し固い肉を子どもたちはしっかりと噛み、生態系の中に入っていく。“地球の懷に抱かれている”という感覚が家族の背景にすき込まれている。

この暮らしぶりから、長い歳月をかけて地球が創り出した生態系という仕組みはすばらしいということを感じ取る。その仕組みに沿って見て、気づいてみれば、自分の家もあり、畑もあり、仲間もいる。そんなに多くは欲しいものが見当たらなくなった。更に、企業の社員研修や社会貢献事業の依頼も右肩上がりだ。生態系という仕組みが社会や経済にも通用することを実感している。

暮らし自体がプログラム。本当にこれが大事なんだという実感がある。そしてこの実際を伝えたい。

